

略案（2コマ）

※この略案は一例ですので、学校や学級、児童の実態に応じて適宜変更して授業を行ってください。2コマを使つての授業をお勧めしますが、やむを得ず1コマで行う場合にはシミュレーション活動を2つにすると行えます。

1. 単元名 僕、私と弱視のお友だち
2. ねらい 物語と体験を通して弱視について知り、弱視の友だちとのかかわり方を考えられるようになる。
3. 本時のめあて 弱視のお友だちについて知ろう
4. 本時の活動

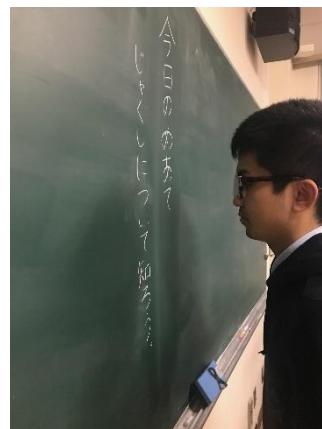
	活動内容	指導上の留意点
つかむ (5分)	1 障害と聞いて思い浮かぶことや知っていることを口頭で話す。 (もし可能であれば、学校や学級に在籍する弱視児が自分の見え方などを含めて自己紹介をする。)	・はじめに児童から障害について知っていることを引き出し、その後で、「弱視」についての話を引き出せるようにする。 本時は「弱視」についての学習をすることを伝える。 (弱視児が発表を行う際には、自信をもって発表に臨めるように原稿を用意しておく。)
	めあて：弱視のお友だちについて知ろう。	
深める (70分)	2 弱視について知る。 3 弱視のシミュレーション体験をする(各10分程度)。 A. 黒板に書かれた文字を読み、ワークシートに記入する。 B. 工作をする。 C. 配膳をする。 D. 視覚補助具を使って見る。	・デジタル絵本(「学校大好きあいちゃん」)を見せる。 ・児童の実態に応じて、適宜デジタル絵本の場面を取り出して見せる。 ・体験は区切りの良いところでトイレ休憩などをはさむ。 ・1人ひとつずつシミュレーションメガネを配布する。 ・全体験はシミュレーションメガネを着用して行う。 ・シミュレーション眼鏡は指示があるまで着用しないこと、体験中に気持ち悪くなった場合には申し出ることを伝える。 ・板書を見ることを通して弱視児の見え方を体験できるようにする。 ・枠からはみ出さないように書くことの難しさを体験できるようにする。 ・線の太さの違うものを塗ったりはさみで切ったりして作業のしやすさの違いに気が付けるようにする。 ・配膳の難しさやコントラストによる見え方の違いに気が付けるようにする。 ・単眼鏡や拡大読書器を使うことで、見えやすくなる体験ができるようにする。
振り返る (15分)	4 本時の活動を通じての感想や疑問に思ったことなどを発表する。 (もし可能であれば、弱視児が答えたり、話したりする。)	・弱視児の思いと本時の学習を通じて考えたことや疑問に思ったことなどをクラスで共有できるようにする。 (弱視児が話しやすいようサポートしたり、今後の生活でお願いしたいことなどを弱視児と一緒に原稿にまとめておく。)

シミュレーション体験について

1班 A→B→C→D 2班 B→C→D→A 3班 C→D→A→B 4班 D→A→B→C

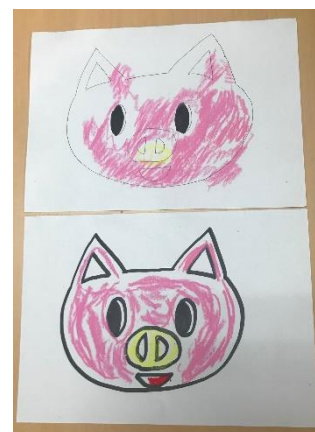
課題 A (板書)

- ・シミュレーション眼鏡を着用して黒板に書かれた文章を読み、ワークシートに記入する。文字が見える距離まで近づいて見る。
※最大まで近づいて見ても見えないときには、シミュレーション眼鏡を外して見る。
- ・読んだ文章を、シミュレーション眼鏡を着用してワークシートに枠線からはみ出さないように記入する。始めは通常の枠線のワークシートに記入してその後、太い枠線のワークシートに記入する。



課題 B (工作)

- ・シミュレーション眼鏡を着用して塗り絵をする。細い輪郭線の絵と太い輪郭線の絵を塗って、どちらが塗りやすいか比べる。
- ・シミュレーション眼鏡を着用してはさみで紙を切る。細い輪郭線と太い輪郭線に沿って星形を切つて、どちらが切りやすいか比べる。
※2人組になる。1人がシミュレーション眼鏡を着用してはさみで紙を切る。もう1人がシミュレーション眼鏡を着用せずに作業を見守って危険な場合には声をかける。



課題 C (配膳)

- ・シミュレーション眼鏡を着用して、お椀にカレーをよそう。カレーは茶色の絵の具を溶かした水に様々な色のブロックを入れたバケツを用意する。
 - ①自由にお椀によそってみる。
 - ②様々な種類の具(ブロック)を入れることに気をつけてよそってみる。
 - ③全ての具をバランスよくよそうことにチャレンジしてみる(周囲の児童はよそいやすいように工夫して声がけてよい)。

課題 D (視覚補助具)

- ・視覚補助具を使って見る体験をする。単眼鏡で遠くのものを見たり拡大読書器で教科書を見たりする。通常の教科書と拡大教科書を見比べる。

